



十
子
母
系
記
譜

特
へ遠¹³
969
10



明遠 3
號 969
卷 10



繪事金花詩卷之十

目錄

後倉殿中同對之車



繪事金花詩卷之十

爰梶原ト出セル公實ハ酒井雅樂頭ノ事
 平三位ノ人物ト見タリ祖父雅樂頭ハ
 徳川家ノ大志士ニシテ高名ノ家ナリシヲ
 聳負頭ノ私欲ヨリシテ家名ヲ
 此侍ノタメニ没収セラレ世界ノ馬
 鹿牛本ニナラシテ末ノ世迄笑草ト
 ナリシ七殘念至リナリ可憫ハ上ニ座
 ス此人々能々心ヲ附テ可取捌事要也

繪本金花談卷之十

鎌倉殿中問對之事

同日十九日鎌倉大政所の裁判不具服谷帯ワカテ才系幼孫中と
 石出とを双方對立の久是此の裁判ありと
 執政請有司の人々威儀嚴重に出座せし服谷帯刀才系幼孫中
 及び互々在彼の年寄役間之周防中修良信長外記及六葉若外記
 齋地司馬やゆとも付添のころ遠りく着坐せりこのとき中央の坐ハ
 月宰の裁許と目より大膳大進廣之者坐きたし才系が上ののこめハ
 左圓形之帯帯刀が上ののこめを淡路廣之者兩温察者成をめて扱へり
 ありて許ゆをいへるをいへる言上と取次のやふらびとれたる腰太夫
 及人向ひ今夜帯刀が祈るところの預めつたをてんむ白紅同あつと云々

會本八卷七談卷之十

寛政分限の事(四) 双方の是れは對立修付したる人の意趣は
ところも極く普同とて一にさげすばばた酒傍居る事帯力
出でる由なる内証は高きに上り早れ帯力源向い唯今上は
違へ裁許と異なりところの趣は右件の箇条の余を以て裁許のは
あつてもあつても今出限とて一に去庫取とて申すは
領事をとるる意勢の如きりば何の陳謝に申すこととてさへ違は
飛も依り續く弁録の條を以て申すは却て罷に墜ん今日は
そは裁許と異なりとて一に飛科の如きふ似たり。又系知存は是
いふは飛科を去庫取法とてけいおを退還けその身のお取
却て倍長の時として女千代後足とて。且鎌倉館中の年寄やくと
兼んとてに耳順み余る事数とて一に嫉妬侮札のころごと抱さ

懸たる大改許の御事(五) 飛科の御事(六) 飛科の御事(七)
とては飛科を以て申すは道理ぞゆき唯今言上しては飛科の
箇条ひもくして去庫取某の覺治とてとあり。却てゆきを
大さるる飛科あり今二十七条の如き一は飛科を以て申すは
飛科を以て申すは下り申すは御事(八) 飛科の御事(九)
飛科の御事(十) 飛科の御事(十一) 飛科の御事(十二)
飛科の御事(十三) 飛科の御事(十四) 飛科の御事(十五)
飛科の御事(十六) 飛科の御事(十七) 飛科の御事(十八)
飛科の御事(十九) 飛科の御事(二十) 飛科の御事(二十一)
飛科の御事(二十二) 飛科の御事(二十三) 飛科の御事(二十四)
飛科の御事(二十五) 飛科の御事(二十六) 飛科の御事(二十七)
飛科の御事(二十八) 飛科の御事(二十九) 飛科の御事(三十)
飛科の御事(三十一) 飛科の御事(三十二) 飛科の御事(三十三)
飛科の御事(三十四) 飛科の御事(三十五) 飛科の御事(三十六)
飛科の御事(三十七) 飛科の御事(三十八) 飛科の御事(三十九)
飛科の御事(四十) 飛科の御事(四十一) 飛科の御事(四十二)
飛科の御事(四十三) 飛科の御事(四十四) 飛科の御事(四十五)
飛科の御事(四十六) 飛科の御事(四十七) 飛科の御事(四十八)
飛科の御事(四十九) 飛科の御事(五十) 飛科の御事(五十一)
飛科の御事(五十二) 飛科の御事(五十三) 飛科の御事(五十四)
飛科の御事(五十五) 飛科の御事(五十六) 飛科の御事(五十七)
飛科の御事(五十八) 飛科の御事(五十九) 飛科の御事(六十)
飛科の御事(六十一) 飛科の御事(六十二) 飛科の御事(六十三)
飛科の御事(六十四) 飛科の御事(六十五) 飛科の御事(六十六)
飛科の御事(六十七) 飛科の御事(六十八) 飛科の御事(六十九)
飛科の御事(七十) 飛科の御事(七十一) 飛科の御事(七十二)
飛科の御事(七十三) 飛科の御事(七十四) 飛科の御事(七十五)
飛科の御事(七十六) 飛科の御事(七十七) 飛科の御事(七十八)
飛科の御事(七十九) 飛科の御事(八十) 飛科の御事(八十一)
飛科の御事(八十二) 飛科の御事(八十三) 飛科の御事(八十四)
飛科の御事(八十五) 飛科の御事(八十六) 飛科の御事(八十七)
飛科の御事(八十八) 飛科の御事(八十九) 飛科の御事(九十)
飛科の御事(九十一) 飛科の御事(九十二) 飛科の御事(九十三)
飛科の御事(九十四) 飛科の御事(九十五) 飛科の御事(九十六)
飛科の御事(九十七) 飛科の御事(九十八) 飛科の御事(九十九)
飛科の御事(百) 飛科の御事(百一) 飛科の御事(百二)
飛科の御事(百三) 飛科の御事(百四) 飛科の御事(百五)
飛科の御事(百六) 飛科の御事(百七) 飛科の御事(百八)
飛科の御事(百九) 飛科の御事(百十) 飛科の御事(百十一)
飛科の御事(百十二) 飛科の御事(百十三) 飛科の御事(百十四)
飛科の御事(百十五) 飛科の御事(百十六) 飛科の御事(百十七)
飛科の御事(百十八) 飛科の御事(百十九) 飛科の御事(百二十)
飛科の御事(百二十一) 飛科の御事(百二十二) 飛科の御事(百二十三)
飛科の御事(百二十四) 飛科の御事(百二十五) 飛科の御事(百二十六)
飛科の御事(百二十七) 飛科の御事(百二十八) 飛科の御事(百二十九)
飛科の御事(百三十) 飛科の御事(百三十一) 飛科の御事(百三十二)
飛科の御事(百三十三) 飛科の御事(百三十四) 飛科の御事(百三十五)
飛科の御事(百三十六) 飛科の御事(百三十七) 飛科の御事(百三十八)
飛科の御事(百三十九) 飛科の御事(百四十) 飛科の御事(百四十一)
飛科の御事(百四十二) 飛科の御事(百四十三) 飛科の御事(百四十四)
飛科の御事(百四十五) 飛科の御事(百四十六) 飛科の御事(百四十七)
飛科の御事(百四十八) 飛科の御事(百四十九) 飛科の御事(百五十)
飛科の御事(百五十一) 飛科の御事(百五十二) 飛科の御事(百五十三)
飛科の御事(百五十四) 飛科の御事(百五十五) 飛科の御事(百五十六)
飛科の御事(百五十七) 飛科の御事(百五十八) 飛科の御事(百五十九)
飛科の御事(百六十) 飛科の御事(百六十一) 飛科の御事(百六十二)
飛科の御事(百六十三) 飛科の御事(百六十四) 飛科の御事(百六十五)
飛科の御事(百六十六) 飛科の御事(百六十七) 飛科の御事(百六十八)
飛科の御事(百六十九) 飛科の御事(百七十) 飛科の御事(百七十一)
飛科の御事(百七十二) 飛科の御事(百七十三) 飛科の御事(百七十四)
飛科の御事(百七十五) 飛科の御事(百七十六) 飛科の御事(百七十七)
飛科の御事(百七十八) 飛科の御事(百七十九) 飛科の御事(百八十)
飛科の御事(百八十一) 飛科の御事(百八十二) 飛科の御事(百八十三)
飛科の御事(百八十四) 飛科の御事(百八十五) 飛科の御事(百八十六)
飛科の御事(百八十七) 飛科の御事(百八十八) 飛科の御事(百八十九)
飛科の御事(百九十) 飛科の御事(百九十一) 飛科の御事(百九十二)
飛科の御事(百九十三) 飛科の御事(百九十四) 飛科の御事(百九十五)
飛科の御事(百九十六) 飛科の御事(百九十七) 飛科の御事(百九十八)
飛科の御事(百九十九) 飛科の御事(百) 飛科の御事(百一)
飛科の御事(百二) 飛科の御事(百三) 飛科の御事(百四)
飛科の御事(百五) 飛科の御事(百六) 飛科の御事(百七)
飛科の御事(百八) 飛科の御事(百九) 飛科の御事(百十)
飛科の御事(百十一) 飛科の御事(百十二) 飛科の御事(百十三)
飛科の御事(百十四) 飛科の御事(百十五) 飛科の御事(百十六)
飛科の御事(百十七) 飛科の御事(百十八) 飛科の御事(百十九)
飛科の御事(百二十) 飛科の御事(百二十一) 飛科の御事(百二十二)
飛科の御事(百二十三) 飛科の御事(百二十四) 飛科の御事(百二十五)
飛科の御事(百二十六) 飛科の御事(百二十七) 飛科の御事(百二十八)
飛科の御事(百二十九) 飛科の御事(百三十) 飛科の御事(百三十一)
飛科の御事(百三十二) 飛科の御事(百三十三) 飛科の御事(百三十四)
飛科の御事(百三十五) 飛科の御事(百三十六) 飛科の御事(百三十七)
飛科の御事(百三十八) 飛科の御事(百三十九) 飛科の御事(百四十)
飛科の御事(百四十一) 飛科の御事(百四十二) 飛科の御事(百四十三)
飛科の御事(百四十四) 飛科の御事(百四十五) 飛科の御事(百四十六)
飛科の御事(百四十七) 飛科の御事(百四十八) 飛科の御事(百四十九)
飛科の御事(百五十) 飛科の御事(百五十一) 飛科の御事(百五十二)
飛科の御事(百五十三) 飛科の御事(百五十四) 飛科の御事(百五十五)
飛科の御事(百五十六) 飛科の御事(百五十七) 飛科の御事(百五十八)
飛科の御事(百五十九) 飛科の御事(百六十) 飛科の御事(百六十一)
飛科の御事(百六十二) 飛科の御事(百六十三) 飛科の御事(百六十四)
飛科の御事(百六十五) 飛科の御事(百六十六) 飛科の御事(百六十七)
飛科の御事(百六十八) 飛科の御事(百六十九) 飛科の御事(百七十)
飛科の御事(百七十一) 飛科の御事(百七十二) 飛科の御事(百七十三)
飛科の御事(百七十四) 飛科の御事(百七十五) 飛科の御事(百七十六)
飛科の御事(百七十七) 飛科の御事(百七十八) 飛科の御事(百七十九)
飛科の御事(百八十) 飛科の御事(百八十一) 飛科の御事(百八十二)
飛科の御事(百八十三) 飛科の御事(百八十四) 飛科の御事(百八十五)
飛科の御事(百八十六) 飛科の御事(百八十七) 飛科の御事(百八十八)
飛科の御事(百八十九) 飛科の御事(百九十) 飛科の御事(百九十一)
飛科の御事(百九十二) 飛科の御事(百九十三) 飛科の御事(百九十四)
飛科の御事(百九十五) 飛科の御事(百九十六) 飛科の御事(百九十七)
飛科の御事(百九十八) 飛科の御事(百九十九) 飛科の御事(百)

のにわくもなたふ大衛のる不の跡あつとも後に上り及運たり
 も。そのこと大衛のことにかゝらたふゆめあり友衛が隠居と称す
 ひし頼之の親ゆもこれ頼之をたふと号す病と一友衛は福徳
 用お勢うたれ付隠居付たり友千代僅れ人たをを病勢作付
 らしと頼之の親ゆもこれ頼之をたふと号す病と一友衛は福徳
 旧態と上り及運。主家の老を孤希入といふものあり其この起る
 志摩院とていぐ一孤飛鳥といふ思ふと思ふ人何にみ果る飛科
 そころらへんと思ふゆめあり。是君と頼之る不忠ありゆや
 頼之聖人賢人の身にすよ越なありのかりゆして凡夫のそれ
 うれぬ頼之とや越なとてとて一二年の間に十ヶ条を
 條も越なひ飛へ。十年年月百ヶ条にやとてゆめありとも。

己がゆ二十ヶ条のごとくにのるが親にりて凡夫の思ふともあり
 然れも主人の旧態が然とてたふらるとは飛科ゆとありとの
 無言流あのみとてた。一層このを語りし事切の善うやと耳を
 傾け返すをゆとてな事切の思ふにりて凡夫の心中より一色の文を
 とう出し御傍に二部の系にりてたはし跡は原幼新ゆとて
 にくもたはひもゆゆ下さるるといふ。病二部とて廣之の取ゆ
 とも。廣之ゆゆたゆゆにゆゆの志はゆゆのゆあり其文曰
 湯谷名産の梨子一箱は下赤貴物ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 よゆゆもゆゆゆゆもゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 おはれ善くたゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

服谷帯刀指

と云たうもいふ帯刀が知りぬの知子の名産ゆゑ毎毎こまこま
敵をうごせぬ敵上のな毎々の才来ごごごごごごごごごごごご
一歩づつ瓜送るとをたより教年必承か帯刀文系が方へ知子といは
たうたれ知子に結ぶる返文の去ゆかしてあひげまたたけい
福しなるみ度えも不審いへもとわがうたに幼氣はけいふは
方う返答うゆくと可觀とあういふた因形二帯刀はくも来り
ゆくと文系より上一目目そごまから新三帯刀がうまう
ゆくとおぼあしとPけいふ度え帯刀にうへたれ唯今更ごご
渠ごもはれ遠ういふう帯刀唯ごごごごごごごごごごごごご
ゆくと度えよごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご

と云たうもいふ帯刀が知りぬの知子の名産ゆゑ毎毎こまこま
敵をうごせぬ敵上のな毎々の才来ごごごごごごごごごごごご
一歩づつ瓜送るとをたより教年必承か帯刀文系が方へ知子といは
たうたれ知子に結ぶる返文の去ゆかしてあひげまたたけい
福しなるみ度えも不審いへもとわがうたに幼氣はけいふは
方う返答うゆくと可觀とあういふた因形二帯刀はくも来り
ゆくと文系より上一目目そごまから新三帯刀がうまう
ゆくとおぼあしとPけいふ度え帯刀にうへたれ唯今更ごご
渠ごもはれ遠ういふう帯刀唯ごごごごごごごごごごごごご
ゆくと度えよごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご
と云たうもいふ帯刀が知りぬの知子の名産ゆゑ毎毎こまこま
敵をうごせぬ敵上のな毎々の才来ごごごごごごごごごごごご
一歩づつ瓜送るとをたより教年必承か帯刀文系が方へ知子といは
たうたれ知子に結ぶる返文の去ゆかしてあひげまたたけい
福しなるみ度えも不審いへもとわがうたに幼氣はけいふは
方う返答うゆくと可觀とあういふた因形二帯刀はくも来り
ゆくと文系より上一目目そごまから新三帯刀がうまう
ゆくとおぼあしとPけいふ度え帯刀にうへたれ唯今更ごご
渠ごもはれ遠ういふう帯刀唯ごごごごごごごごごごごごご
ゆくと度えよごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご

舟状の面瓜のりて昔活せらる。ま柄勘平とて者いひしりく小舟の
りよとくとも。友衛が抱室ぐまひ。酒色小長とて。公見すまひ。あま海を渡
がぶとた不立の悪且。海は後川。とて。是悪のり。内丹。是らる。不
忠のともつとを。退ん。凍み。る事。同じ。彼中にあり。あつと。こも。瓜
知。た。と。り。こ。有。海。し。者。て。今。瓜。抛。く。主人。相。憐。も。加。入。と。憐。み
充。た。め。付。と。て。ひ。不。行。状。と。摩。る。信。活。と。も。あ。つ。と。つ。と。て。あ。る。が。ら。
え。来。ぬ。を。摩。る。と。同。意。し。彼。も。も。づ。み。命。し。友。衛。と。悪。道。も。あ。り。せ
主人の放蕩とせ。と。あ。公。に。と。云。は。ぬ。は。也。瓜。は。つ。て。友。衛。と。摩。る。事。は。
細。ま。ら。命。と。絶。望。へ。其。怨。を。去。摩。る。瓜。奪。ん。と。も。る。根。え。ぬ。の。ひ。や。
このねに。と。根。を。公。言。上。し。て。友。衛。が。放。蕩。へ。り。く。よう。海。を。か。ん。り。
い。と。ま。瓜。す。ま。へ。し。若。草。の。ま。え。と。泥土。の中。に。投。げ。ん。と。も。る。人。面。瓜。の。

不忠のり。越。と。言。と。せ。び。び。と。し。て。白。の。五。数。判。と。慕。う。ん。や。と。情。り。面。瓜。
あ。つ。と。は。好。め。的。白。中。の。ひ。を。す。て。ふ。才。系。が。奸。曲。を。も。帯。カ。る。悪。言。の。こ。ら。に。
云。例。さ。う。と。見。え。た。る。ま。に。助。意。中。暴。怒。と。て。せ。し。も。争。情。を。る。執。り。こ。
あ。く。善。て。目。め。が。の。す。と。も。ろ。ろ。の。越。夜。と。揚。ぐ。悪。と。せん。と。する。あ。ひ。こ。し。
ま。柄。が。た。み。瓜。の。り。く。我。と。抱。み。あ。ん。と。も。ら。ん。伽。ら。む。む。も。友。衛。其。海。を。渡。植。
の。み。人。が。抱。と。く。こ。も。の。教。て。抱。室。の。抱。め。と。て。抱。へ。ら。ま。し。る。は。と。あ。く。は。集。ま。り。
え。来。相。憐。し。り。子。り。相。撲。を。瓜。を。抱。へ。ま。ら。し。り。我。怨。の。り。こ。も。あ。く。は。上。受。
忍。と。の。り。百。の。へ。ま。ら。し。り。あ。つ。と。と。相。憐。瓜。く。も。ら。理。も。あ。ん。と。も。ら。し。り。は。
天下の信候方。我。怨。し。り。を。ら。ら。め。小。困。た。と。て。教。ま。の。相。憐。は。る。と。も。ら。し。り。こ。も。
他家。小。例。あ。つ。と。の。依。強。く。憐。を。ま。せ。よ。と。を。ま。と。ほ。ぬ。長。く。抱。室。へ。り。
通。り。の。来。我。度。憐。を。い。と。せ。し。り。其。教。と。も。ら。し。り。も。も。憐。み。も。る。も。ま。人。が。

傳をを殺しむるにたつてあり。其傳ををく又去庫乃の命くふるに
 亦いのゆゆ後悔し。後宋龍と名をあらたしゆがとゆふがゆゆのま
 勿海に金の五ひと止べしと快く塵に客る傳をを作たすに後傳を
 用る人あ對し。君が傳ゆあつて腹挫傷するの天下の内政もあつて
 其のら目多うと退たれむに僅にふ之の近臣とも治るふふのひひで
 竊に再入るるに其の子のゆゆをさるる又僕傳ををとのの役
 るんは其夜うらた付たごゆ。湘津にうへなれともゆゆの館中の
 年寄役我が太圍ゆて奉國の用ゆと鎌倉館中の用ゆと云れゆは
 とく我ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 事ゆゆ自ゆゆその團用ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 まゆ右の近臣も主人控室のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ぼるりの馬のゆゆ進退君のゆゆゆゆゆゆゆゆ君裕と上るゆゆゆゆゆゆ
 引るに止る近臣の事ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ことゆゆ難し。法ゆゆ其柄動平ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 あくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 奉ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ことゆゆ思謙の一例ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 忠臣の道ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 べゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 聖人ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ともゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 とも其ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

今日と一云の花も同む最初よりけり瓜を物々達し。は裁判と唐
 こと不安定の事より。辨文秋夜五へびうより古老二十四人ありと。
 何よりよむ然所しきりやひじり繞み進平してり達するもの
 先親の格式なりびやこまに言れぬの大率と海一人して移すひ
 けりものあり通座を委するゆゆを庫乃瓜退去りせけ。はま事を
 飛小筆し。揚その威と遣せんともふより二十四人の言たよりく
 そのま瓜推察しゆが計計みよせびあをひく嫉妬偏執するものあり
 ろあり。今般の死めりらる。余人の判と並べて人びく公裁を蒙らんする
 その所みよす。帯力が白某余の老后とも判瓜あべびアかひく
 ひしは條さゆあり。ゆゆやゆみ瓜ひらう家樓那が古みかしく入も。
 已に要るものこと其花のあまんとををり。松が崎の屋居友衛の
 方へ後新去馬とを。帯力不極るた長とPま然所瓜を鎌倉に
 づる同方あるはしり。まが佐府とるんをうらうした又ま佐府のあり。
 友衛もそのに去庫なりゆが年来の悪ふを知り。ひことを若知んと
 候にま蓄ふと候瓜り。右帯力が方へをへせしをゆ半途みれたその
 書瓜知より偽事を以てま瓜預下し。ちんと計りし。何のためぞぬ。
 その後友衛も思瓜めく。これ貞悪その去松帯力が手み達せり。ゆ
 もあふん。秋葉平八ふ去を授けり。ゆが方み送る。ゆり友衛のその
 去海性今まが懐中みあり。それをゆ接して退治の七ヶ条とに
 出せる。彼ま人をへり。なるまのうらゆ。後於新去場み毒酒よりこせ
 毒へし。毒言せんと全し。幸ある。む二十七ヶ条の判瓜ゆが移瓜
 りつく。反古みするも。退治す。案のごとく。なま主人のP送り。なま

ありきといふも、その時、今、白紙ありて、主人の志、成つて、こゝろ
出して、承るべし。余、格別、友、徳、毒、酒、を、さ、め、殺、害、せ、ん、と、さ、る、者、と
主人の志、海、を、奪、入、し、う、海、を、危、り、ま、さ、し、う、り、ゆ、ん、と、せ、し、過、言、と、し
り、け、し、た、流、石、徒、舟、の、曲、者、も、主人の、危、跡、を、言、語、分、め、お、言、ふ、と、徒、を、
け、し、た、流、石、徒、舟、守、り、を、多、く、と、衆、一、つ、お、言、ふ、帯、刀、その、方、唯、今、の、ア、ム、
少、し、ゆ、と、子、細、あり、す、川、何、さ、し、と、た、赤、大、膳、大、丈、友、衛、の、年、
四十、は、は、は、隠、居、終、ひ、と、い、て、退、隱、せ、し、其、と、の、預、文、何、と、稱、う、と、
隠、居、公、は、免、あり、し、ぞ、帯、刀、漢、と、海、防、彦、二、弟、と、り、し、と、言、ふ、友、衛、
病、危、の上、也、其、節、疾、病、危、急、る、ゆ、つ、た、退、隱、は、終、ひ、上、し、と、こ、ろ、あり、
貞、信、の、曰、え、る、と、は、今、も、病、中、る、と、い、ふ、是、亦、病、あり、し、と、
病、事、と、り、立、士、女、にも、及、ぶ、と、い、ふ、小、児、も、お、言、ふ、わ、い、は、隠、居、せ、し、退、隱、は、

う、と、い、ふ、故、欺、く、大、衆、あり、病、動、し、固、く、隠、居、せ、ば、友、衛、へ、病、入、る、と、病、中、
且、其、難、語、あり、難、語、あり、し、の、義、と、し、を、い、ふ、人、も、い、う、難、し、又、其、難、語、
と、い、ふ、事、も、お、出、し、し、這、箇、に、あり、し、と、い、ふ、と、起、る、ゆ、ゆ、り、ぞ、病、床、難、語、の、
状、を、衆、許、あり、し、も、さ、か、し、た、推、る、と、ま、の、と、な、り、し、帯、刀、が、あり、と、い、ふ、と、
衆、し、ゆ、と、い、ふ、た、び、の、一、件、あり、し、か、し、難、大、丈、と、い、ふ、古、を、二十、余、人、と、
ひ、り、し、し、ゆ、と、い、ふ、事、も、流、石、徒、舟、あり、し、と、い、ふ、事、も、一、人、と、い、ふ、と、熱、病、と、い、ふ、
こと、ゆ、ゆ、不、審、ふ、方、堀、川、ゆ、ゆ、を、東、國、の、大、鎮、と、い、ふ、事、も、難、語、と、い、ふ、と、
た、る、天下、の、裁判、事、も、海、下、の、事、も、難、語、と、い、ふ、事、も、同、列、と、い、ふ、と、連、言、
し、し、海、下、の、事、も、難、語、と、い、ふ、事、も、一、人、と、い、ふ、事、も、難、語、と、い、ふ、事、も、
一、同、と、い、ふ、こと、ゆ、ゆ、白、り、し、ゆ、ゆ、一、方、の、事、も、難、語、と、い、ふ、事、も、
帯、刀、が、あり、し、ゆ、ゆ、い、ふ、事、も、お、言、ふ、事、も、子、細、も、い、ふ、事、も、
言、と、い、ふ、事、も、一、人、と、い、ふ、事、も、退、隱、は、上、

きん 貞信公の勲を以て不在の事あり。自らの事
只願ふ。返答して難きことなし。過てしんあまき其志を以て
なく。速ふし。常力が日ある。空手と志とあり。いとも遠く言は
し。信を以て上へ。後業連判の儀。毎々後海ころく
は。制禁の一事あり。然ともいへば。なすの事。おののの
とこもあは。候令義許判形をおろく。熱心はくも。連判徒黨の
は。皆伏殺。之を謂ふ。たくり。いとも。金銀を以て。老幼おぼは。何れのみ
よ。いとも。これ事。いとも。國元年。寄とも。中。悉く。よ。各。いとも。氏
云。庫及方。枕系。飛彈。守。様より。い。内。令。同。故。や。いとも。彦。く。し。を
云。令。代。借。く。國。元。の。年。寄。とも。を。威。く。い。由。年。寄。とも。い。も。是。も。枕。系
家。の。は。威。勢。に。忍。び。たり。時。又。云。庫。及。子。長。を。依。り。年。寄。い。は。縁。其。の。列

其の事あり。自らの事
只願ふ。返答して難きことなし。過てしんあまき其志を以て
なく。速ふし。常力が日ある。空手と志とあり。いとも遠く言は
し。信を以て上へ。後業連判の儀。毎々後海ころく
は。制禁の一事あり。然ともいへば。なすの事。おののの
とこもあは。候令義許判形をおろく。熱心はくも。連判徒黨の
は。皆伏殺。之を謂ふ。たくり。いとも。金銀を以て。老幼おぼは。何れのみ
よ。いとも。これ事。いとも。國元年。寄とも。中。悉く。よ。各。いとも。氏
云。庫及方。枕系。飛彈。守。様より。い。内。令。同。故。や。いとも。彦。く。し。を
云。令。代。借。く。國。元。の。年。寄。とも。を。威。く。い。由。年。寄。とも。い。も。是。も。枕。系
家。の。は。威。勢。に。忍。び。たり。時。又。云。庫。及。子。長。を。依。り。年。寄。い。は。縁。其。の。列
其の事あり。自らの事
只願ふ。返答して難きことなし。過てしんあまき其志を以て
なく。速ふし。常力が日ある。空手と志とあり。いとも遠く言は
し。信を以て上へ。後業連判の儀。毎々後海ころく
は。制禁の一事あり。然ともいへば。なすの事。おののの
とこもあは。候令義許判形をおろく。熱心はくも。連判徒黨の
は。皆伏殺。之を謂ふ。たくり。いとも。金銀を以て。老幼おぼは。何れのみ
よ。いとも。これ事。いとも。國元年。寄とも。中。悉く。よ。各。いとも。氏
云。庫及方。枕系。飛彈。守。様より。い。内。令。同。故。や。いとも。彦。く。し。を
云。令。代。借。く。國。元。の。年。寄。とも。を。威。く。い。由。年。寄。とも。い。も。是。も。枕。系
家。の。は。威。勢。に。忍。び。たり。時。又。云。庫。及。子。長。を。依。り。年。寄。い。は。縁。其。の。列
其の事あり。自らの事
只願ふ。返答して難きことなし。過てしんあまき其志を以て
なく。速ふし。常力が日ある。空手と志とあり。いとも遠く言は
し。信を以て上へ。後業連判の儀。毎々後海ころく
は。制禁の一事あり。然ともいへば。なすの事。おののの
とこもあは。候令義許判形をおろく。熱心はくも。連判徒黨の
は。皆伏殺。之を謂ふ。たくり。いとも。金銀を以て。老幼おぼは。何れのみ
よ。いとも。これ事。いとも。國元年。寄とも。中。悉く。よ。各。いとも。氏
云。庫及方。枕系。飛彈。守。様より。い。内。令。同。故。や。いとも。彦。く。し。を
云。令。代。借。く。國。元。の。年。寄。とも。を。威。く。い。由。年。寄。とも。い。も。是。も。枕。系
家。の。は。威。勢。に。忍。び。たり。時。又。云。庫。及。子。長。を。依。り。年。寄。い。は。縁。其。の。列

邪正大いに爲差せり。彼若くは友衛が代は此の如くお厚しにしよう。此の如く
困え年身どもより追放しつゝなり。のまると終るとは本意もく、
糾めり追放せり。の瓜を庫から友衛が代とてえらる。この如く
不良の老瓜くまひとて事いふある道理も、
も代とて考あり。お。家ゆく令渡る瓜をひあつひ豆の如く
ねせり。老瓜お家の内の内抱へお下賤とて何とてその如く
並べらる。まてを庫から諸侯の身とて死に續ある老瓜とて
この年竟程斗た瓜とてさる。の申は、
お。家ゆく令渡る瓜をひあつひ豆の如く
屋中のぬきとてその如くお撲とる。この如く
大車瓜はまてり。彼と追放しつゝなり。自然外にこの如く

一 二千石

右為大原幼島中流人不知其終不之也返者也

月日

若城玄庫改判
大場宗易とて

又一通こまの卯右集の紙を二千百石の折紙なり。廣元紙をこまの紙に
折けり右の玄庫より折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
先刻何いもうと折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
なると先刻の折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
り。いれられ廣元紙の紙を二千百石の折紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
同字なりふらふ幼島中流に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
中分あるまじ。折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
先年九九一十の天徳寺に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に

相傳はりし地のはれの舟方ありふ付をわおむいれと合はせしは
そとゆらの舟方と舟方ありふ付し船の船の注しそけりふらふ一箇箇
合はせしと舟方と舟方ありふ付し船の船の注しそけりふらふ一箇箇
合はせしと舟方と舟方ありふ付し船の船の注しそけりふらふ一箇箇
お絶ふし其ら又又後日五百石紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
毒葉のゆめありふ付し船の船の注しそけりふらふ一箇箇
天地を渡りお絶ふし其ら又又後日五百石紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に
廣元の五百石の紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に折紙をこまの紙に

友樹と應一。友千代を毒害せんとす。もまた去庫くろと油あぶらなるは
 お透おとろるにたが方かた系けいが回まわりては油あぶらの毒どくりあり。又回まわりては友
 判はん客かくは判はん人にんとし。本ほん成じやう終しゆめ終しゆくは友樹ともきも害がいせんとす。こも、十じゆ人にんて
 海うみ鳥とりの取とるや、神かみの賢けん者しやうあましく、あては其そのに去いる廣ひろえも終しゆめ國くに賊ぞく不ふ
 義ぎの正ただましく、他ほかの毒どくにせしむるあり。あまを回まわりては油あぶらの毒どくりあり。又回まわりては友
 判はん客かくは判はん人にんとし。本ほん成じやう終しゆめ終しゆくは友樹ともきも害がいせんとす。こも、十じゆ人にんて
 海うみ鳥とりの取とるや、神かみの賢けん者しやうあましく、あては其そのに去いる廣ひろえも終しゆめ國くに賊ぞく不ふ
 義ぎの正ただましく、他ほかの毒どくにせしむるあり。あまを回まわりては油あぶらの毒どくりあり。又回まわりては友
 判はん客かくは判はん人にんとし。本ほん成じやう終しゆめ終しゆくは友樹ともきも害がいせんとす。こも、十じゆ人にんて
 海うみ鳥とりの取とるや、神かみの賢けん者しやうあましく、あては其そのに去いる廣ひろえも終しゆめ國くに賊ぞく不ふ

繪本金瓶梅卷之十終

